

川崎市の子どもの実態と発達の段階に合わせた 参加・体験型学習プログラムの作成

－ 望ましい人間関係をはぐくむために －

特別活動研究会議

渡部 義昭¹

中尾 和美²

齊野 保史³

新井 紀代美⁴

要 約

現在、人間関係の希薄化に伴い、人とのかかわり方の未熟さによる問題が様々なところで指摘されている。先行研究では、人とのかかわり方を学ぶのに参加・体験型学習を諸活動に取り入れると効果があり、信頼関係が築きやすくなることが実証されている。この学習は単発で行うよりも、継続的に取り組むのが望ましい。

そこで、本研究会議では子どもの実態と発達の段階に合わせて小学校・中学校の9年間を通し、系統的な参加・体験型学習の年間プログラムを作成することにした。

まず、実態を把握するために児童生徒と教師を対象に「人間関係」に関しての意識調査を行い、子どもたちにとっての人間関係の課題を探った。その上で、発達の段階において身につけたい力（自他の理解能力・コミュニケーション能力）と参加・体験型学習の授業における工夫をそれぞれ示し、年間の流れを意識した参加・体験型プログラムを完成させた。

プログラムは「かわさき★きらりプログラム 2007」と名づけ、多くの人が活用できるように、全職員に配付した「かわさき K タイム」の事例を多く取り入れた。

キーワード：参加・体験型学習、プログラム、発達の段階、身につけたい力

目 次

I 主題設定の理由	132	(1) 人間関係育成の構想	135
1 川崎市の子どもの現状	132	(2) プログラム作成上、配慮した点	136
2 参加・体験型学習の必要性	132	5 プログラムの活用方法	139
3 計画的・系統的なプログラム	132	(1) 教育課程を配慮した活用	139
II 研究の内容	133	(2) ベーシックプログラムの活用	139
1 研究の方法	133	(3) 発達の段階に応じた活用	141
2 望ましい人間関係について	133	III 研究のまとめ	145
(1) 望ましい人間関係の目標	133	1 研究から見えてきたこと	145
(2) 身につけたい力	134	2 今後の課題	146
3 人間関係についての調査結果と考察	134	(1) プログラムの完成をめざして	146
(1) アンケートの概要	134	(2) 関連性の検証	146
(2) アンケートの結果と分析	134	参考文献	146
4 プログラム作りの取組	135	指導助言	146

¹川崎市立生田中学校教諭（長期研修員）

²川崎市立下平間小学校教諭（研修員）

³川崎市立四谷小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立南河原中学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

1 川崎市の子どもの現状

人間関係の諸問題の一つである「いじめ」に対して川崎市総合教育センターでは「児童生徒の豊かな人間関係を育てるために」の調査の中で「いじめが起きてもかかわりあいになりたくないという回答が増加していることは重要な課題である。」¹⁾と述べている。また、学校生活に適応できない児童生徒について川崎市年刊教育調査から各学年での不登校者数を見てみると、小学校から中学校に上がる段階で急激に増加している傾向がわかる(図1)。

不登校の要因の一つに人間関係の希薄化に伴う対人関係のあり方の未熟さが挙げられるが、その対策には人間関係を築く場を教師が意図的に設定し、それぞれの学年で発達段階に応じた指導の必要性があると考えられる。

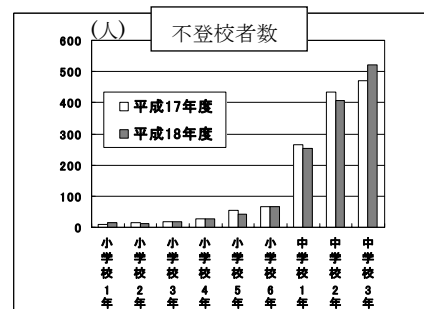


図1 川崎市年刊教育調査統計

2 参加・体験型学習の必要性 — 先行研究から —

特別活動では集団活動を通して所属感や連帯感を高め、人間関係を形成する力を身につけることを一つの目標としている。しかし、地域や家庭で信頼関係を築く体験ができにくい今の子どもたちの中には、集団の中で「恥ずかしい」「自分の意見が否定されたら怖い」など自分の本音を出すことに抵抗を感じている子どもも多くいる。

川崎市の先行研究では「人とのかかわりと集団づくり」について次のような検証を行っている。

- H14 研究会議「学級活動の授業をグループワーク化することは子どもたちの社会性（かかわる力、創る力）を高める手だてとなる」
- H17 研究会議「参加・体験型の活動を計画的に取り入れることで児童生徒と教師の信頼関係を基盤とした望ましい話し合い活動につながる」（研究より抜粋）

H17年の主題は『自発的、自主的態度をはぐくむ学級活動 — 小・中学校における望ましい「話し合い活動」の在り方』であったが、話し合い活動に入る前に、教師と児童生徒、児童生徒相互の信頼関係に基づく支持的な雰囲気をつくるのが、望ましい集団を築くのには有効であると述べている。

このような研究の積み重ねから人とのかかわり方を学ぶのに参加・体験型学習を諸活動に取り入れると効果があり、信頼関係が築きやすくなることがわかった。

3 計画的・系統的なプログラム

川崎市の小・中学校の教師を対象に実施した「学級活動についてのアンケート」（特別活動担当教諭 61 人を対象）では、個人的に参加・体験型学習を行ったことがあると回答した教師が多数いるのに対して、学校全体で取り組んでいると答えた教師は全体の5%であった(図2)。取り組むことができない理由として「時間が取れない」が一番多く、必要性を感じながらもできない状況が感じられる。

計画的・系統的なプログラムの作成の必要性について岡田弘は「人間関係の在り方というのはある一つのことを教えたからそれで終わりではなく、発展性がでてこないといけない。」と述べている。つまり、人間関係を育てるには発達の段階に応じたプログラムを系統的に考えなければならない。

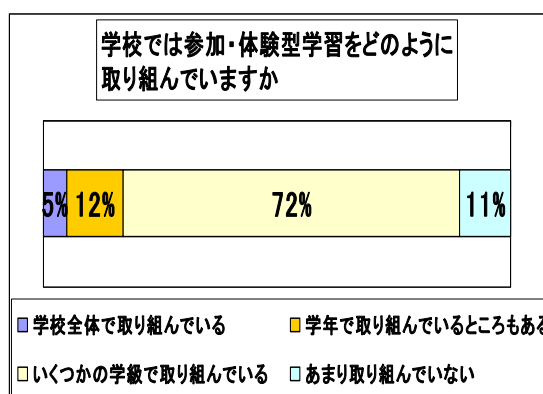


図2 学級活動についてのアンケート (H19年5月実施)

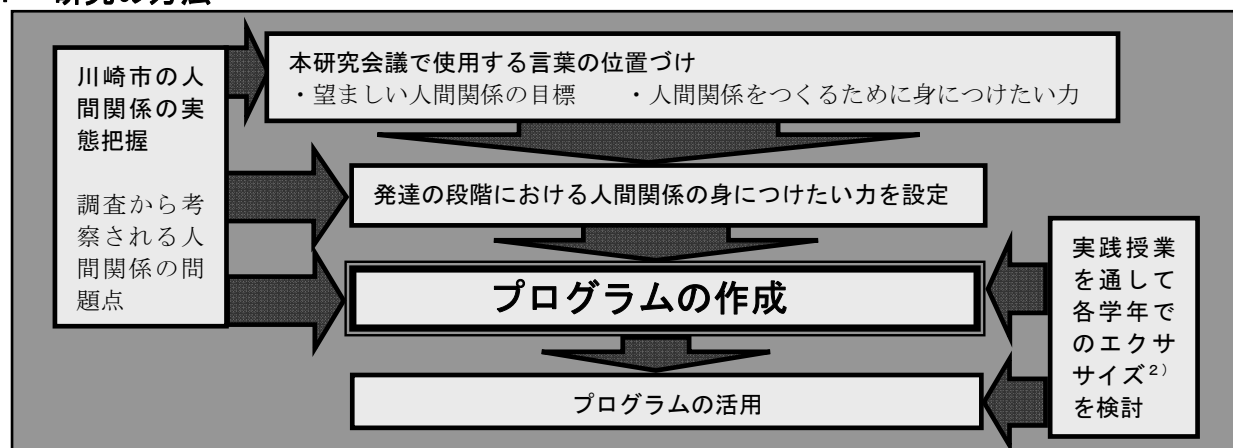
¹⁾ 川崎市総合教育センター「児童生徒の豊かな人間関係を育てるために・中間報告書」2007年

また、川崎市では小・中学校の研究会などで参加・体験型学習の実践研究をしている教師も多く、川崎市の子どもの実態に十分に配慮した系統的なプログラムがあれば、各校での広まりが期待できるのではないかと考え、このテーマを設定した。

**川崎市の子どもの実態と発達の段階に合わせた
参加・体験型学習プログラムの作成**
—望ましい人間関係をはぐくむために—

II 研究の内容

1 研究の方法



2 望ましい人間関係について

(1) 望ましい人間関係の目標

本研究会議では、川崎市の子どもの人間関係の実態から、望ましい人間関係について探る必要があると考えた。そのため、児童生徒にアンケートを行い、その内容をまとめたところ、表1のような問題傾向があることがわかった。これは他者とのかかわり方を学んでいく上での課題となるものと捉え、川崎市の望ましい人間関係の目標を表2のように位置づけた。

表1 川崎市の子どもの人間関係に関する問題

- ・相手の気持ちを感じられない。
- ・相手から自分がどう思われているのかが気になる。
- ・集団の中で自分の意見を主張できない。
- ・集団の中で折り合いをつけられない。
- ・集団が固定化して、他者を傷つけてしまう。

表2 川崎市の望ましい人間関係の目標

- 共感できる関係（自他理解、感受性の促進、信頼体験）
 - ・相手の心の状態が想像できる関係
- 信頼できる関係（信頼体験、自他理解、感受性の促進、自己受容）
 - ・問題があってもそれを乗り越える信頼感がもてる関係
- 表現し合える関係（自己表現・自己主張、自己受容）
 - ・集団からの圧力に負けずに自分の意思をしっかりと相手に伝え、聴くことができる関係
- 協調し合える関係（自他理解、自己主張）
 - ・他者を認め、折り合いをつけながら共通の目標に向かって行動できる関係
- かかわりを広げられる関係（自他理解、自己表現・自己主張、信頼体験）
 - ・固定化した仲間集団から新たな人間関係を構築していき、様々な考え方を受け入れる態度が持てる関係

²⁾教師のねらいを達成するための課題。

(2) 身につけたい力

人間関係をつくるには、他者とのかかわりがもてるような態度や能力を育てる必要がある。しかし、他者との関係について学んでもそれを受ける自分の資質が育っていないと、互いに認め合い、信頼関係を築くことはできない。そこで本研究会議では、人間関係の育成における身につけたい力を2つに分けて次のように位置づけた。

<p>①自他の理解能力 自己の理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力。 他者とのかかわりの基盤となる能力</p>
<p>②コミュニケーション能力 多様な集団・組織の中での相互の伝達や豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力。 他者との円滑な関係を築くための能力</p>

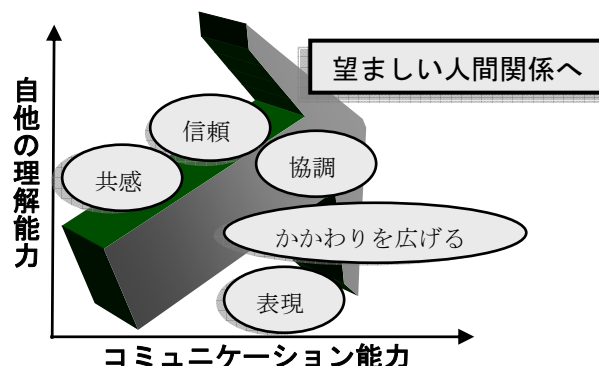


図3 望ましい人間関係をめざすための身につけたい力

この2つの力はどちらを先に身につければよいというものではなく、図3のように互いに相乗で学んでいくものである。この力を身につけることによって「望ましい人間関係」に近づくプログラムを作成する。

3 人間関係の育成についての調査結果と考察

川崎市の子どもの実態に合わせたプログラムを作成するには、児童生徒や教師の意識、実態把握が必要であると考え、アンケートを実施した。

(1) アンケートの概要

○調査名	児童生徒対象「いごちのよい生活を送るためのアンケート」	教師対象「人間関係の育成に関するアンケート」
○調査目的	子どものコミュニケーションに対する意識調査・教師の人間関係の育成に関する意識や実態の把握	
○調査方法	質問紙法	
○調査対象	児童生徒 1165名	川崎市立小学校6校(3年生 428名, 6年生 354名) 川崎市立中学校6校(3年生 383名)
	教師 135名	小学校教師(85名) 中学校教師(50名)

(2) アンケートの結果と分析

①アンケートの結果と分析

ア 児童生徒に対して行った「いごちのよい生活を送るためのアンケート」の分析(表3)

- ・学年が進むと、悩みを相談する対象が親から友達に変わっていく。
- ・学年が進んでも肯定的な意見が持続しているもの(中3の時点での肯定的な意見の割合)
 『自分の考えを話すことができる』(80.4%) 『話を最後まで聴ける』(89.9%) 『嫌なことは嫌と言える』(77.3%)
 『誰とでもあいさつができる』(68.9%) 『失敗した時にすぐにあやまることができる』(84.3%)
- ・学年が進むと肯定的な意見が減少しているもの(小3から中3へ肯定的な意見の割合の移行)
 『自信をもてるものがある』(79.6%→66.6%) 『友達から信頼されていると思う』(66.6%→47.8%)
 『学級の役に立っていると思う』(45.6%→22.7%) 『ルールを守っていない友達に注意できる』(63.8%→26.9%)
- ・「いつも一人でいることの多い人」に対して「人は人、関心がない」と答えた児童生徒は学年が進むと増加する。

イ 教師に対して行った「人間関係の育成に関するアンケート」の分析 (表4)

- ・「他者とのかかわり方」を学校で教えることについては、ほとんどの先生が必要と感じている。
- ・「他者とのかかわり方」を意識した取り組みを行っている」と答えた先生は小学校では90.6%、であったが、中学校では75.0%と低くなる。
- ・人間関係に関する学習にロールプレイなどのスキル学習を行うことは効果があると感じている。
- ・各学年での必要な人間関係における社会的スキルについて多かったものは
 小学校低学年『協力する』『気持ちを伝える』 小学校中学年『きまりを守る』『相手の気持ちを理解する』
 小学校高学年『相手の気持ちを理解する』『気持ちを伝える』
 中学生 『相手を理解して受け入れる』『自分を肯定的に受け入れる』

②アンケートの考察

ア 発達の段階に合わせた深いかかわり方

中学3年では「自分の考えを話すことができる」「人の話を最後まで聞ける」「嫌なことは嫌と言える」などの、自分の意思を伝える基本的なスキルはできると感じている児童生徒が多いことがわかる。しかし、「学級の役に立っている」「ルールを守っていない友達に注意できる」のような互いに信頼して本当に友達のことを思いやれる関係に対しての質問では、学年を経るとかなりの割合での低下が見られた。このことから発達の段階に合わせた「友達と深くかかわれる取組」が必要であることがわかった。

イ かかわりを積極的にもつことと学級での自己有用感³⁾

「誰とでもあいさつができる」と「学級の役に立っている」のクロス集計の結果、誰とでもあいさつができる児童生徒ほど自己有用感が高いという傾向にあることがわかった(図4)。あいさつとは心を開いて相手に迫るものであり、誰とでもあいさつができる児童生徒は積極的にかかわりを広げることができる要素を持っている。川崎市の子どもたちは学年が進むと自己有用感が低くなる傾向があるので、かかわりを積極的にもてる指導を行ってあいさつの大切さなどを確認したい。

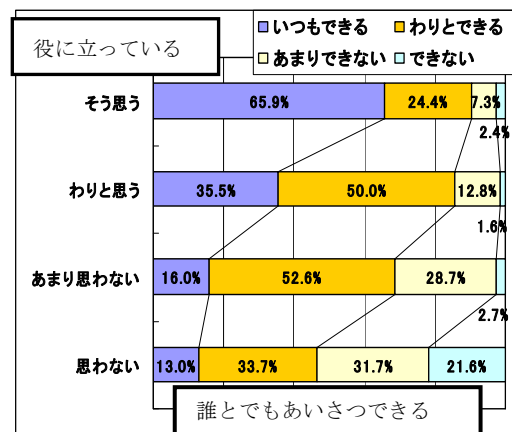


図4 誰とでもあいさつができる×役に立っている

ウ 学年に応じた身につけたいスキル

児童生徒の望ましい人間関係をつくるのに必要なスキルについて教師に質問したところ、それぞれの学年の発達の段階に応じた結果が得られた。まず、小学校低学年では「友達と協力して活動する」ことが最も多く、個の活動から集団での活動に適応できることが、課題となることがわかった。次に小学校中学年では「きまりを守る」ことが最も多く、勉強や遊びの中できまりをつくり、それに従って動くことによって集団の中の個人を意識することが課題となることがわかった。次に小学校高学年では「相手の気持ちを理解する」ことが最も多く、相手の立場で物事を考えることで多様な考えを受け入れて、精神的にも身体的にも個性が出てきた友達を受け入れることが課題となることがわかった。最後に中学生では「相手の気持ちを理解する」と「相手を受け入れる」ことが多かったが、それと合わせて「自分自身を肯定的に受け入れる」ことも他の学年に比べると多かった。中学では自分を受け入れながら将来の目標などを設定していくことがこの時期の課題となる。

4 プログラム作りの取組

(1) 人間関係育成の構想

まずは参加・体験型の学習を行うことにより、居心地のよい学級、達成感の味わえる学級を築き、集団内の人間関係を育てていく。また、その中で築いた安心感、信頼感、協調性をもとにして各教科(互いに教え合える関係)や異学年集団の活動(学校行事、クラブ活動、部活動、児童・生徒会活動)などで人間関係を築く力をさらに高めていく。また、教師に関しても、あいさつ、環境整備(教室や廊下の掲示物、下駄箱)などを通して生徒とのコミュニケーションを積極的に図り、学校全体でのあたたかい人間関係をつくることができると考える(図5)。

³⁾ 自分のやる事が相手のためになるという意味を見いだしたときに感じる充実感。

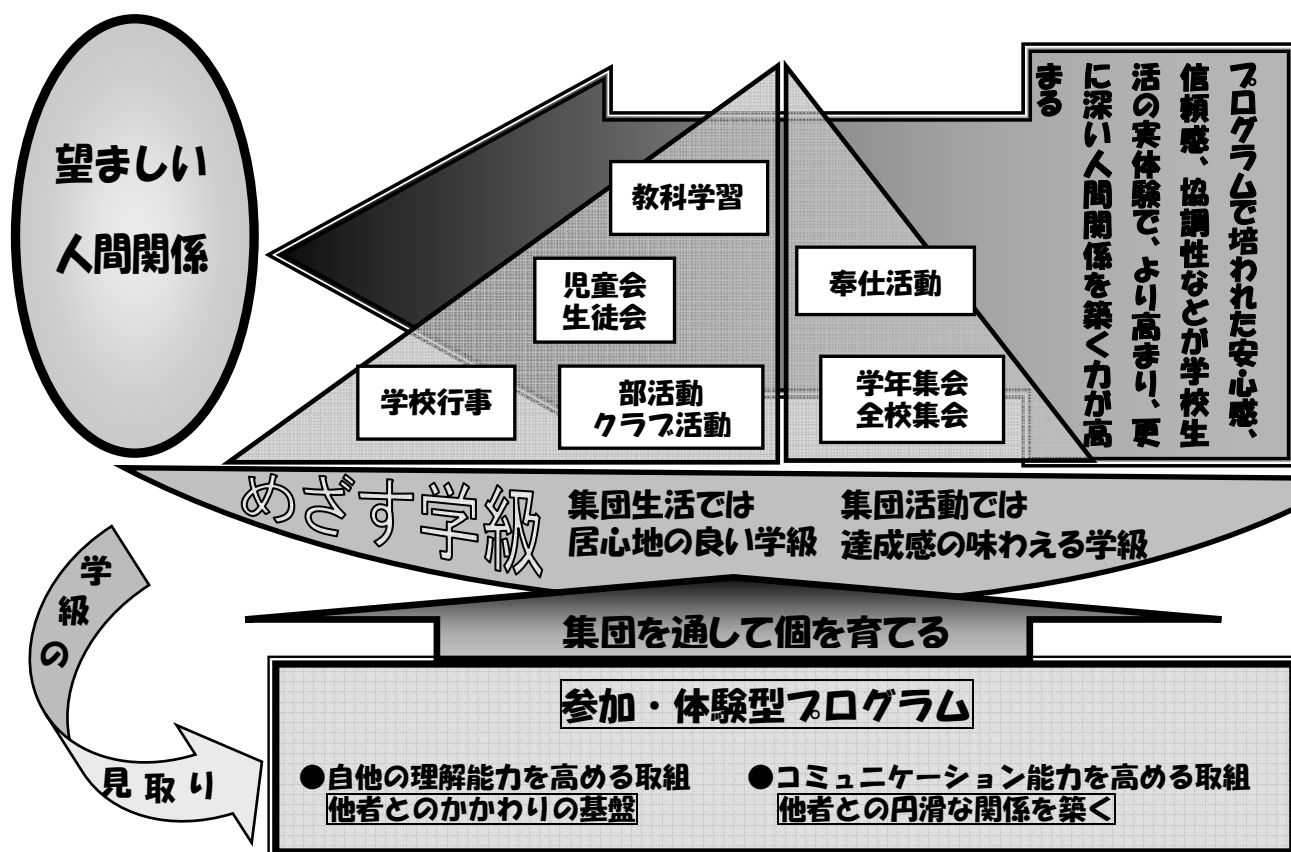


図5 人間関係育成の構想図

(主に学級活動の時間で実施)

(2) プログラム作成上、配慮した点

① 発達の段階における人間関係育成の課題と各学年のキーワード

プログラムを各学年の発達の段階を踏まえた内容にするために、精神分析者エリクソンの発達課題と谷島弘仁のものを参考にし「児童生徒の発達の段階における身につけたい力」の表を作成した。

エリクソンの発達課題では、学童期と青年期(思春期)の2つのステージを用いて、学習すべき行動を示した。それに対して川崎市のアンケートを照らし合わせてキーワードを設定し、各学年での身につけたい力を考えた。(136 ページに掲載)

② エクササイズを選定

プログラムの目標は自他の理解能力とコミュニケーション能力の2つの力を身につけ、望ましい人間関係を築ける子どもたちを育成することである。ここでは発達の段階を考慮した上で、2つの身につけたい力において、各段階でエクササイズを選んだ基準を示す。

ア 自他の理解能力

自他の理解能力とは自己の理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にしていける力であり、他者とのかかわりの基盤となる能力である。プログラムでは表5の基準をもとに他者を受け止めてくれる共感性や信頼感、協調性を主に育てていくエクササイズを選択した。

(表5)

自他の理解能力におけるエクササイズを選択基準	
小学校低学年	学校生活に適應できることが重要になる時期。そのためには基本的な集団生活の中でみんなと遊ぶことの楽しさを味わえる体験をする必要がある。エクササイズを選定では主に遊びからルールを学ぶことができる取組を行う。

小学校中学年	友達との仲間関係が重要になってくる時期。低学年で味わった一緒に体験することの喜びや楽しさを基盤にして、仲間と活動することについてより深く考えられることが必要である。エクササイズの設定では主に自己理解、他者理解の取組を行う。
小学校高学年	集団の中での友達関係についての悩みが増える時期。また、学校のリーダーとしてその力を十分発揮することも期待されるので、お互いを認め合える集団の形成が必要である。そのために、自分の長所や短所をよく知り、それを受け入れる必要がある。そうすると他者も自分と同じように受け入れ、認め合える集団が形成されるので、学級の雰囲気がよくなっていく。エクササイズの設定では自己受容、他者受容を中心とする取組を後半に行う。
中学校	青年期へ移行する時期なので仲間と距離を保ちながらも自分のよいところを生活の中で活かしていける技能を身につけさせる。また、親にも話せない秘密を共有し合える友達を作り、信頼関係を育んでいくことが大切である。エクササイズの設定では考えながら他者の気持ちが感じられるようなゲームや心理的な分析などで自分の気持ちを客観的に知ることができる取組を行う。

イ コミュニケーション能力

コミュニケーション能力とは多様な集団・組織の中での相互の伝達や豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく力であり、他者との円滑な関係を築くための能力である。プログラムでは表6の基準をもとに、模擬体験を通して感じたことを話し合い、感情の交流をはかることで主に表現力やかかわりを広げる力を育てていくエクササイズを選択した。

(表6)

コミュニケーション能力におけるエクササイズの設定基準	
小学校低学年	あいさつなどの基本的な生活が送れるようなスキルを学校生活全般において指導する。しっかりと自分のことを伝える取組を行う。
小学校中学年	相手の視点に立って伝えることが必要である。自分の意見や気持ちを相手にわかりやすく表現する、友達の気持ちを理解しようとする、などの取組を行う。
小学校高学年	学級、学年、学校全体のことを考えていくことが必要である。問題を解決する方法、学年の異なる仲間とかかわる方法を習得させる取組を行う。
中学校	自分に自信が持てず、自分の思ったことを言葉で表すことが困難な子どもが増えており、小学校の時よりも気持ちと言葉が繋がらない子が多い。他者に配慮しながらも、自分の気持ちをしっかりと伝える取組を行う。

③エクササイズの年間の流れ

エクササイズの年間の流れについては学級に所属する個人の成長を考慮して配置した。

最初の学級開きでは「リレーションづくり」をねらいにするエクササイズを行うように配置した。また、休み明けで集団への一員としての意識が薄れたときや、班編成を変えるときなどにもこの「リレーションづくり」をねらった活動を行い、学級内のあたたかい人間関係を築けるようにした。小学校低学年ではこのリレーションづくりを多く取り入れている。

次に「自他発見」をねらいにしたエクササイズを配置し、人間的な成長を図れるようにした。互いに自己開示ができるようになれば、より深い他者理解へとつながるので、学年が上がっていくにしたがって価値観や感情を表現するようなエクササイズを増やしていくようにした。

小学校高学年以上では自己への新たな気づきをもとに自己の概念の変容や行動の変容をめざす「人間的成長」をねらいとしたエクササイズを後半に行うようにした。そして、学年の最後では自己の成長をめざしたエクササイズに取り組み、次年度への意欲を高めるようにした。

発達の段階における身につけたい力

(表7)

		小1	小2・3	小4・5	小6	中1	中2	中3
身につけさせたい力	自分の目標の達成力	みんななかよし (保護者にも理解)	みんなといると たのしいね	みんなちがって みんないい	自分の力で みんなの力で	自分を見つめて 気持ちを合わせて	ありのままの自分 ありのままの他者	自分を信じ 仲間を信じる
	コミュニケーション能力	<ul style="list-style-type: none"> 約束を守って楽しく遊ぶことができる。 友達と仲良く遊び助け合える。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達のよいところを見つげられる。 自分のよいところを見つげられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の良いところを認め、励まし合うことができる。 自分の長所や短所に気づき、自分らしさを発揮できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解できる。 自分の生活を支えている人に感謝できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の言動が他者に及ぼす影響が分かる。 自分の感情を分析できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよさや個性が分かり、他者のよさや感情を理解し、尊重することができる。 自分の感情をコントロールできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の個性、行動様式、価値観を受け入れた上で、自己の目標を設定することができる。 自分の悩みを話せる人を持つことができる。
		<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事ができる。 自己紹介ができる。 「ありがとう」「ごめんなさい」が言える。 されて嫌なことは嫌と言える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをみんなの前で話せる。 友達の話を聴くことができる。 遊び仲間に入れてあげることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現できる。 友達と協力して、ルールを守って学習や活動に取り組める。 相手の立場に立って考えて行動ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他人の心情を自分のものであるとして受け止められる。 異年齢集団の活動に喜んで参加し、役割と責任を果たすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境や人間関係に適応できる。 ルールを守って行動ができる 他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係の大切さを理解し、社会の一員としてのコミュニケーションスキルを習得できる。 自分と違う意見であっても尊重し、それを受けて自分の考えを伝えることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の考えや意見を受けとめて、自分の考えを協力的・建設的に伝えることができる リーダーとフォロワーの立場を理解し、チームを組んでお互いに支えながら仕事ができる。

[参考] エリクソンの発達課題 (教育カウンセラー標準テキスト 2006 pp.31-34) 谷島弘仁 (児童心理 2006年5月号「友だちつきあいが大切」)
「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」(国立教育政策研究所生徒指導研究センター 平成14年11月)

5 プログラムの活用方法

(1) 教育課程を配慮した活用

学級活動についてのアンケート（川崎市小・中学校の教師 61 人を対象に 5 月に実施）の中では「参加・体験型学習」について取り組むのが難しい理由の 1 位が「時間が確保できない」であったが、プログラムを実施するには次のような視点も必要である。

①望ましい人間関係の育成の重点化

学習指導要領「内容の取り扱いについての配慮事項」の学級活動の項に、次のように示されている。

学級活動については、学校や児童(生徒)の実態に応じて取り上げる指導内容の重点化を図るようにすること。

参加・体験型学習で行われる人間関係育成プログラムは学校の教育活動全般で効果が期待できる。学校全体で人間関係を育成するためには、「望ましい人間関係の育成（確立）」という項目を年間指導計画に組み入れることが必要である。

②他の取組と連携して取り組む

学級活動、児童・生徒会活動、クラブ活動など、それぞれの活動目標の達成を考えて、短時間で可能な参加・体験型学習を取り入れることを考えた(プログラムでは通年継続として紹介)。

(2) ベーシックプログラムの活用

このプログラムは、ベーシックプランとして作成しているため、活用にあたっては、よくその学校の実態や特色をふまえた上で取り組む必要がある。学級の児童生徒や学級集団の状態によっては参加・体験型学習を行うことに抵抗が感じられる場合があるが、学級担任は、授業や普段の生活から自分の学級を観察し、それに適したものから取り組むのが望ましい。

また、行事なども各学校によって状況が変わってくるので、それぞれの学校、学年に合わせて系統的な取組を考える必要がある。

①学級の見取りとエクササイズを選択

まず、このプログラムでは「リレーションづくり」「自他の発見」「人間的成長」が達成できるエクササイズを学年の特色に応じて入れてあるので、クラスの実態がそれぞれの段階であるのかを次の表 8 から判断して、エクササイズを選択するとよい。

表 8 クラスの実態とエクササイズを選択

段階	クラスの実態	ねらい	具体的なエクササイズ例
1	入学後や学級編成後など、まだ集団として成り立っておらずお互い交流ができていない	リレーションづくり 【互いの理解】	ジャンケン列車、人間コピー、何でもバスケット、他
2	集団としてはまとまって見えるが、お互いの理解が十分でない	自他の発見 【理解の深化】	いいとこみつけ、ねえ、どっちがいい、他
3	学級全体が明るく活発な雰囲気である	人間的成長 【自己主張】 【他者受容】	私はわたしよ、私のお願いを聞いて、他

平成 18 年度の先行研究である「参加・体験型人権尊重教育の実践事例集作り」中の実態テストもクラスの実態を把握する方法として活用することができる。

他にエクササイズを選択として配慮する点では、児童生徒が活動にあまり興味を示さない場合はゲーム性の高い動きのあるものから行うとよい。そして、体が触れ合うものや深い自己開示を伴う活動についても一人一人の子どもの実態を見て配慮すべきである。

②学校行事を効果的に行うための活用

学校行事は「学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと」と学習指導要領に記されている。この行事のねらいをより効果的に達成

するために、行事前に集団の結束力とやる気を高める取組が必要である(表9)。また、行事後ではまとめてシェアリング⁴⁾をすることによって、より効果的に所属感を深めることができる(表10)。

ア 行事前に集団の結束力とやる気を高めるために (表9)

<p><エクササイズの実施について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム内でメンバーがそれぞれの役割を果たすような取組。 ・協力することの大切さを実感できるような取組。 ・「みんな違ってみんないい」を実感できるような価値観にふれる取組。

イ 行事後にまとめとしてシェアリングをする (表10)

<p><エクササイズの実施について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・行事を支えてくれた人を様々な視点から認め合い、お互いの協力を確認し合える取組。 ・行事そのものをエクササイズとして見立て、まとめをシェアリングの要領で行う。

③人間関係に関する諸問題の予防としての活用

ア いじめ問題の予防での活用

いじめの予防では被害者、加害者の視点ではなく、属している集団に目を向けて対処する必要がある。問題が起こる前にその集団に対して手立てを行うことが大切になるのではないかと考える。(表11)

<p><取り組む時期></p> <p>川崎市の『児童生徒の豊かな人間関係を育てるために』の調査の中で、いじめの発生する時期は小・中学校ともに4月から6月に多いことがわかった。その対策のためには学年の始まりの4月に重点的に時間を取り、「人のかかわり方」についての体験学習をすることが望ましい。</p> <p><エクササイズの実施について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校低・中学年では人とかかわっていると楽しい、人と一緒にいると充実するという遊び体験を行う。 ・小学校高学年・中学校では他者を認める取組を行い、お互いのかかわりを強める。そして問題があった時にそれを克服しようとする信頼関係を育てていく。
--

イ 小1プロブレム・中1ギャップの予防としての活用

中央教育審議会初等中等教育関係部会教育課程部会合同会議(平成18年)で各教科等の改善に関する議論の方向性が出され、特別活動では「小1プロブレム、中1ギャップなど集団への適応にかかわる問題」が取りあげられた。小1プロブレムとは小学校に入学してきた子どもたちが、着席・整列などの指示に従えず、学級経営が成り立たなくなる状態⁵⁾をいう。川崎市でもアンケートから80%以上の教師が川崎市にもそのような傾向が見られると答えており対策が必要と考えられる。

中1ギャップとは中学校に入学したときに学業不振や学校不適応を起こす子どもたちが急激に増加する現象⁶⁾をいう。川崎市の教師のアンケートの結果から70%の先生方が川崎市でも中1ギャップを感じると答えている。長期欠席者調査では中1ギャップの特徴である不登校が理由で欠席をしている子どもが小6から中1にかけての著しく増加していることがわかる。また、その次の中2にかけても不登校児童生徒数が増えていることについても対応をしていくべきと考える。

(表12)

<p><エクササイズの実施について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小1プロブレムには幼稚園、保育園の教師と連携をはかり、体験入学を行うなどの具体的な活動を行う。また、子どもたちには友達とあいさつや返事をするのが楽しいと思う体験、もしくはみんなでルールを守って遊ぶことの楽しさを味わうことができる取組を行う。 ・保護者に対しても保護者同士であたたく受容的な人間関係をつくれるような取組を行う。 ・中1ギャップには中学校の教師が小学校の教師と連携をはかり、段階を追って引継ぎができるようにする。他者から自分の価値を認められ、居場所が見つけられるような取組を行う。 ・中2で増える不登校者については中1から中2の連携を考える必要がある。特に中1の終わりでは別れを意識した取組をするのが一般的であるが、次の学年でも頑張ろうと思えるものを取り入れるとよい。

⁴⁾参加者がエクササイズで体験したことをお互いが分かち合うこと

⁵⁾ ⁶⁾ 河村茂雄「データが語る①学校の課題」図書文化2007年

(3) 発達の段階に応じた活用 —実践授業を通して—

①参加・体験型学習の流れについて

参加・体験型学習は体験を通して参加者相互が感じたことを学び合い、深めていく学習である。図6はその展開例であるが、この授業をまとめると、心理面の発達を促す課題(エクササイズ)を体験し、その思いを友達同士で共有する(シェアリング)ことで、自己発見へとつながる。そして、同時に学級の凝集性も高まっていくので、その中で望ましい人間関係を築くことができる。

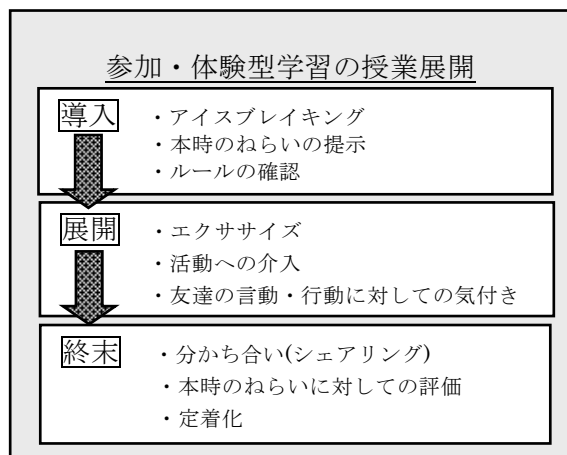


図6 参加・体験型学習の授業

②発達の段階に合わせた授業の取組

参加・体験型学習プログラムでは、実施する学年のどの時期にどのエクササイズを行えばよいかを示している。しかし実際に授業を行ってみると、小学校1年生と中学校3年生で同じ取組をしているは効果が上がらない。そこで、本研究会議では授業実践を通してエクササイズの選択、授業の導入、展開、終末の工夫を示した。

ア 授業実践の概要とポイント(小学校1年生、小学校4年生、中学校3年生)

実践授業1 活動名 言葉のプレゼント

エクササイズのねらい (他者理解)

友達のよいところを見つけて知らせたり、自分のよいところを伝えてもらったりする活動を通して互いに認め合う気持ちを高め、自分の居場所を感じ取るきっかけをつくる。

学級の状態【小1：リレーションができてきた今、だれもが主人公となる場を求めて】

- ・1年生らしいやる気いっぱいの素直な子どもたちで、些細なトラブルは起こるが、全体的に落ち着いていて、いろいろな活動に皆、前向きに取り組むことができる。
- ・集団生活を初めて体験する児童がいてトラブルの原因になったり周りの子から注意されたりすることが多い。

本時の目標

- ・友達のよさを見つけ、言葉をプレゼントすることで仲間のよさに気づく。
- ・お互いによいところを見つけて伝えたり、伝えてもらったりする活動を通して、互いに認め合う気持ちを高める。

本時の活動

- 導入** ねらい「友達のよいところを見つけよう」
- 展開1** 「みんなで輪くぐり」 3つのグループになり、輪になって手をつないだままフラフープを一周させる。2回行い、タイムを縮める。
- 展開2** 「言葉のプレゼント」 友達のいいところを書いたカードを言葉のプレゼントとして渡す。

	活動内容	活動の様子	考察
導入	○アイスブレイキング	実施せず。	1つの目のエクササイズが動きのあるものだったので、あえて必要がなかった。
	○本時のねらいの提示	子どもがわかりやすいように具体的な例を出してねらいを提示する。 T 今日授業は友達のよいところをたくさん見つけ伝えることをします。	わかりやすい所に掲示をしてめやすを活動中でも意識させる。
	○エクササイズ1の説明	T 今日「みんなで輪くぐり」というゲームをします。 C 「しってる～」という元気な声に混じって「知らない～」という声がかける。 T じゃあAグループさん、お手本に立って知らないって言った子に教えてあげようね。 T 手をつないでわっかになってください。先生も一緒にやります。そうしたらね、このフラフープを手をつないだままぐるぐる回してここまで戻すゲームです。さあ、やってみよう。 C 興味津々で静かにモデルのグループを見ている。 T (次の人にフラフープを回して)これ、どうしよう？ C (グループの何人かが)足をあげるの！とアドバイスをしている。 C (フラフープが最後まで回ると)よかったねと他のグループから拍手。 T これをABCグループさんにやってもらいますが、これは競争ではありません。2回やりますからそれぞれのグループがタイムを縮めるように頑張ってください。 C (全員が前を向いて)はい！	まずは言葉だけでは、楽しい活動ということが伝わらないので、実際にやってみて子ども達の興味が持てるようにした。 初めてのエクササイズについてはモデルを示してあげる。

導入	○ ルールの確認	やってはいけない行動を示すだけでなく、望ましい行動(応援、アドバース)も示した。 ルールの定着を図って掲示をする。	なるべく短い説明で、必要なことを伝えるようにする。
展開	○ エクササイズ1 「みんなで輪ぐり」	全部の班が一生懸命に取り組んでいるが、ルールを忘れて夢中になってしまう子もいる。 T 手は離さないでね！頑張て！ C Aちゃんが約束守ってない！ T いけないんだよって教えてあげて！多分夢中になっちゃったんだよ。	配慮の必要な子を見ながらも、初めてのエクササイズではルールが守られているか注意してみる必要がある。
	場面ごとに雰囲気を変える事が大切。 ○ ふり返り1	T (小さい声で)どのグループもタイムが縮まったよね。こんな風にやったら縮まったんだよ。とか誰々さんがこんな風に上手だったよ！とか、いいところをみつめて教えてくれる人いませんか？ C (半分くらいの子が手をあげる)じゃあBさん立って！最初は遅かったんだけど、2回目になったらみんなが早くなった。 T 2回目になったら、急に上手にできるようになったんだね。コツをつかんだんだね、すばらしい、拍手！ 他にも何人かの子どもを当てて、担任の言葉で返してあげた。	1年生では発言した子の言葉を指導者が返すなど、意図の明確化をするなどよい。スピーカーとなりみんなに広めることで十分なふり返りとなる。
	○ エクササイズ2 「言葉のプレゼント」	事前に隣の人のカードを書くことで、説明の時間が省け、ねらいである「友達のいいところ探し」を継続できた。カードを渡すとき、もらうときは「はい、どうぞ」「ありがとう」の声をかけることを指示した。 T それではみんないっぱい書いてくれたので、交換タイムをしたいと思います。 C やったー！(みんなたくさんのカードを持っている) T 交換するときに、何も言わなくて渡すのはどう？ C だめ！(全員がしっかりといえた) T じゃあ、どうやって渡そうか？ C いつもありがとう、頑張りましたね、よろしくね T もらった人は何ていうんだっけ？ C ありがとう。	言葉をプレゼントするのに、それを渡す態度で嬉しさが変わって行くことを意識させた。
	○ ふり返り2	T じゃあ、お友達から言葉のプレゼントをもらったけどみんなどうだった？ C うれしかった！(みんな顔を上げている) T もらうとうれしいよね。 C あげたときが気持ちよかった。 T 今、いいこと言ってたよ。もらうときにうれしかっただけじゃなくて、いい言葉をあげた時も気持ちよくすっきりするのね。 C 笑顔がかわいって所ににっこりマークが書いてあったのがうれしかった。 T かわいい楽しい絵が書いてあると、さらにうれしくなっちゃうね。	ねらいにせまった発言などを評価して強化すると良い。 友達のいいところを見つけること、もらうことが互いに認め合うことにつながる。
終末	ねらいに対しての評価 日常生活への定着	T 今日は友達のよいところをたくさんみつけることができました。みんなは先生が思ったより見つけるのが上手ですね。これを続けると1年2組さんが、仲良く、楽しくなるよね。 T お花の貼ってない所はどうしようか？ C また、そういうのをやって完成させる！ T 毎日の生活の中で言葉のプレゼントタイムをつくってもいいね。せっかくだから、言葉のプレゼントコーナーを作ってみんなが見えるようにしたいと思います。	普段の生活の中でも意識することで、学級の中にあたたかい人間関係を築けるようになる。

実践授業2 活動名 サッカージャンケン

エクササイズのねらい (他者理解)
 ジャンケンを通して多くの相手とかかわり、その仲間と一緒に活動することで他者への積極的な関心や好意的な関心を高める。

学級の状態【小1：新しい友達ともかかわりを持ちたい 休み明けで集団活動を再確認したい】
 ・後期に入って学校生活にも慣れ、どんなことにも意欲的に取り組もうとする姿勢がみられた。
 ・転入児童が入り、学級のみんなはその子がどんな子なのか興味をもって、きっかけを待っている。

本時の目標 ・誰とでも仲良く活動できることの楽しさを感じる。 ・ルールを守って活動することの大切さや努力することの楽しさを味わう経験をさせる。	本時の活動 導入 ねらい「転校生のA君とも仲良くなって、後期も元気に頑張ろう」 展開1 「カムオン」 王様を一人置き、順番に王様とジャンケンをする。勝てば次の人と変わり、負ければカムオンと言ってチームを呼び、王様を一周する。勝つまで続け早く全員が終わったらチームの勝ち。 展開2 「サッカージャンケン」 2チームに分かれて、攻めと守りとなり、攻めのチームは何人かの守りの人にジャンケンで勝って最終的にキーパーに勝利したら得点。時間で攻守の交代をして合計得点で競う。
--	---

小学校1年生の授業のポイント (実践授業1、実践授業2から)
 ○短いエクササイズをつないで集中力を持続、ねらいを最後まで明確に示す
 1年生では一つの活動を1時間続けるとねらいが定着しにくくなるので、動きのあるものと座って記入する活動と形式の違う2つのエクササイズを用意した。
 ○エクササイズを何度も繰り返すと、子どもの積極性が高まりルールを守って活動できる
 小学校1年生では言葉を理解して行動することが難しい子もいる。そういう子には何度か同じエクササイズを行うことによって安心して活動することができる。また、繰り返すとルールが定着されるので、約束をする時間の短縮だけでなく、お互いが「こうするんだよ」と声をかけあう自治的な活動が見られる。

○ねらいの掲示は大事

実践2ではねらいを掲示したため、途中で「つまらない」といって座り込んでいた子に対しても、ねらいを示しながら上手に介入することができた。

○競争ではなく協力が大事

実践1の「みんなで輪ぐり」では競争ではなく、自分たちのタイムを縮めることを目的として行ったため、時間がかかってしまった班も他の班と同様に達成感を味わうことができた。

○感想を述べる時間を多く

参加・体験型学習ではお互いの感情交流を図ることで他者理解に近づくとされているが、小学校1年生ではまだ自分のことを話したいという気持ちが強く、互いに本音を出し合える仲間での話し合いまではいかない。よって自分の感じたことをみんなに伝える活動を増やした。

○普段の活動への定着化

実践1の「言葉のプレゼント」を6月の掲示物として活用したところ、普段の生活の中で友達のよいところを探す姿勢が見られた。

実践授業3 活動名 共同絵画

エクササイズのねらい（他者理解）

他者の感情を意識しながら自分の感情を表現する。

学級の状態【小4：前期の締めくくりとして学級で協力する姿勢をもちたい】

・みんなで明るくリレーションがとれている状態。

本時の目標

- ・集団で一つの絵を描くことによって協力を実感する。
- ・他者の絵に自分の絵を付け加えることにより、相手がどう感じるかを想像する。

本時の活動

導入

ねらい「協力することができる」「気持ちを伝えることができる」
アイスブレイキング「トラスタップ」

4人のグループで足をつけて手をつないで座り、同時に立つ

展開

「共同絵画」丸い紙に4人が輪になって座り、それぞれ自分の前の場所に好きな絵を描く。次に絵を右回りにまわし、隣で書いた人の絵に自分の絵を付け加える。それを繰り返して一つの絵を完成させる。

小学校4年生の授業のポイント（実践授業3から）

○深いかわりが期待できるエクササイズを導入

低学年ではとにかくみんなで同じことをする活動が多く行われてきたが、同じような活動でも中学年では違いを意識して自己理解と他者理解のエクササイズを入れていくとよい。

○身体接触をするエクササイズでは注意が必要

他者の目を気にする児童が増え、身体接触に対して恥ずかしがるようになるので、エクササイズを選択するときには学級の状態をよく把握する必要がある。身体接触に関しては、触れることでお互いの安心感や信頼感を得やすいので、できれば積極的に取り入れるべきだが、学級の中で抵抗を感じる児童がいる場合は参加の自由を認めてあげるとよい。その際に不参加の子に対しては手伝いをお願いするなどの手立ても考えておくとよい。参加しないことで学級の雰囲気は乱れるようならば、無理に行わない。低学年のうちから身体接触のあるエクササイズを取り入れていると抵抗が少なくてすむ。

○ねらいにせまるための具体的な行動を意識

ねらいは授業全般にわたって意識させておく必要があるが、その具体的な行動を事前にイメージしておく、児童に示しやすい。例えば協力することとはルールを守って活動することだと具体的に意識することによって、児童の活動の中でそのような行動が見られたときはそれを評価して行動を強化することができる。

○少人数での分かち合いを取り入れていく

中学年以降では集団の意識が少しずつ出てくるので少人数での分かち合いを積極的に取り入れていく必要がある。ただし、何も指示を出さずに話し合いをさせても、「楽しかった」「おもしろかった」などの表面的な感情表現しか出てこない場合もあるので、最初は「私はあなたの〇〇に対して〇〇と思った」などの形式を示すとよい。

実践授業4 活動名 いいところ四面鏡

エクササイズのねらい（自己理解・他者理解）

少人数のグループにおいてお互いに相手のよさを認め、いごちのよい集団づくりをする。

学級の状態【中3：明るくつながりのあるクラス リーダーの空回りが気になる】

行事などでも積極的に練習に取り組める。しかし、リーダーが思い通りにいかないと攻撃的な言動を発してクラスがまとまらないときもある。新しい自分を発見して級友のよさを知り互いを認め合える活動がしたい。

本時の目標

・新たに自分を発見し、級友のよさを知り理解を深める。
・互いを認め合えるようになる。

本時の活動

- 導入** ねらい「友達のよいところを見つけて伝えよう」
アイスブレイキング「後だしじゃんけん」
- 展開** 「いいとこ四面鏡」 少人数に分かれて互いのよいところを見つけて○をつける。次にその相手に○をつけた理由を説明する。

中学校3年生の授業のポイント（実践授業4から）

○集団の状態をより意識した上でエクササイズを選択

中学生になると集団からの圧力が強くなるので、自分の内面を話せる安心した雰囲気が作れている状態でなければ、お互いを評価し合うことはとても難しくなる。「いいとこ四面鏡」などの自他の発見をねらうエクササイズでは実施前に学級内のリレーションを作り、安心してあたたかな人間関係を築いてから取り組むべきである。

○年間を見通して取り組む

人としてのあり方を探しているこの時期は自分の価値観や人生観などの内面の要素が常に変化していくものである。そのためと同じような自己分析を2回行い、自分の成長を見るエクササイズも必要になってくる。

○中学生でもねらいの揭示は大事

一つのエクササイズに深く取り組む授業でも、ねらいをしっかりと押さえることが大切である。最後のふり返りシートはそのねらいの達成について確認できるものにするよ。

○分かち合いは小グループから全体へ人数を増やしていく

二人組で感じたことを班で報告し、それを代表が全体に発表すると、自分の活動がしっかりと全体に受容されることになる。他者との関係を意識する中学生にとっては、このことが安心や達成感につながる場合もあるので、時間を意識して、分かち合いの時間をしっかりと確保したい。

イ 授業実践の考察

小学校1学年、小学校4学年、中学校3年生での授業を実践してみて、参加・体験型学習のそれぞれの段階での特徴をみる事ができた。

○小学校1年生のキーワード みんななかよし

小学校低学年の実践1では、年度当初にクラスのリレーションづくりを行っていたので、6月には遊びの中で友達のよい所を探すエクササイズを選んだ。高学年では「いいとこ探し」で友達のよいところを探して他者理解、自己理解を図るが、1年生に対しては「みんなで輪くぐり」と合わせて具体的な行動から友達のいいところを探す取組を行った。

この授業が終わってから休み時間や放課後でもカードを作ったり、あげたりしている姿を見て、多くの友達とかわるといふねらいは達成できたのではないかと思われる。次に小学校低学年の実践2では、転校生が入ってきた休み明けということで、新しい友達とのリレーションづくりを意識して取り組んだ。配慮した点は活動中に転校生へグループ内での声かけができるように、今までやってきたエクササイズを再度行い、教えてあげる場を設定したところである。低学年では自分中心の活動になるのだが、教えることで自分が学級の役に立ったという自己有用感にもつながることも意識した。また個人対抗戦でなくグループ対抗戦であるサッカージャンケンを組み入れたことも、所属感を高め、グループ活動が楽しかったという気持ちになれたのではないかと考える。

○小学校4・5年生のキーワード みんなちがってみんないい

小学校中学年では協力と伝え合うというねらいを強く前面に出して活動を行った。エクササイズを進行しながらねらいに合った行動ができる子を評価することは参加・体験型の学習の基本である。しかし、エクササイズ中ではルールが徹底されているか、心的外傷を受けていないかなどの介入の必要性を常に確認するので、ねらいに沿った行動を見つけることは難しい。そのために事前にエクササイズの中で予想される子どもの行動とねらいとの関係をイメージしてから授業を行うことが大事である。

○中学校3年生のキーワード 自分を信じ、仲間を信じる

中学校3年生の授業実践では、進路について自分の道を選択していくこの時期にお互い頑張っていこうというねらいで「いいとこ四面鏡」に取り組んだ。この学級では普段から計画的に参加・体験型学習を行っており、今回の授業も年間の流れについて意識した活動展開となっている。

年度始めはリレーションづくりを行い、かかわりができてきたところで、フォロワーとリーダーを育成する。そして各行事で集団の凝集性を高めながら自他理解を深め、お互いを認められる状態で前期を終了することができた。そして部活動や生徒会活動(各種委員会、生徒会本部)を2年生に引き継ぎ、集団活動から個人目標の実現に向けての活動へと切り替えていった。

月	エクササイズ名	そのエクササイズを選んだ背景
4	「まちがい探し」 「ももちゃんのおつかい」	クラス開き グループ活動を取り入れることで小集団に慣れる
5	3クラス合同	慣れてきたが自分をまだ出せない。活動を通してリーダーを育てる
6	「☆(ほし)いくつ」	体育祭、修学旅行などの行事を経験して自他理解できる
7	「私のものさし」 「エリザベスのお部屋を決めて」	よりよいグループ活動をめざして個人の役割に気づく
8	「ねえ聴いて私の高校報告」	夏休み明け、気持ちの切り替えをして平常の生活へ、そして前期のまとめ
9	「クラスにとって大切な人は」	
10	「私の発達曲線」	後期の新しい学級の組織づくり 後期の新たな決意
11	「いいとこ四面鏡」 本時	

本時では、今までの努力の認め合いを行ったが、この活動は子どもにとって大変意味があった。授業では男女関係なく真剣な態度で互いのいいところを語っている姿が見られ、時間を過ぎてても最後まで伝えていたペアもあった。また、授業の最後のふり返りシートでは自分の内面への気づきからそれを基に頑張っていくような内容の文章が見られた。

友達から見た自分について伝えてもらった今、どう思うか

- ・ 自分の思っているイメージより違うイメージが聞けてよかった
- ・ みんな自分のことをちゃんと見てくれたと言う事がまず嬉しかった
- ・ いつも接することの少ない人がたくさんよいところを言ってくれたので、とても嬉しかった
- ・ 自分は案外頼られているのかなと思った
- ・ 分かってもらえないと思っていた自分の頑張りを実は見てくれていたというのがとても嬉しかった
- ・ 本当の自分はどんな人なのか知りたくなりました
- ・ 静かというイメージがあったが、自分はこのイメージが嫌いなので変えていきたい

このエクササイズを行って気づいたこと、感じたこと

- ・ 人のいいところを見つけられて楽しかった
- ・ 自分の思っている以上に人は自分のことを見ていてくれるのだと思った
- ・ 普段言えないようなことをしっかりと伝えてとてもスッキリした
- ・ 自分が口にしないだけで、忘れかけていた友達のよいところを見つけることができたし、自分ももっと伸ばしたい面、維持したい面が見つかってよかった
- ・ 自分のことは自分自身よりも他の人の方がよく見ている

このエクササイズでは自分のことを言ってくれたことで、自分は見られている、認められているという所属感や自己肯定感を味わえたと思われる。これから卒業に向けて一層個人で努力していかなくてはならない時期にこのような取組を行うことは有効と考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

1年間の研究会議の中で、小学校と中学校との教員が共同で研究することにより、お互いに子どもの発達の段階をよく認識する必要があることを強く実感できた。

小学校では人と積極的にしかかわる体験を多く行い、自己理解、他者理解の基礎を築くことで信頼関係をつくり、また、中学校ではその信頼感から安心して自分の長所や短所などすべてを受け入れ、役割を果たし達成感を得ることで、自己有用感につながっていくというような、それぞれの学年で子どもの実態に合わせた取組を行うことの必要性がプログラムを作成することでわかってきた。

また、参加・体験型学習を取り組む上で教師にとって必要なことは、子どもをしっかりと見取り、ねらいを明確にもつことである。エクササイズの選択、活動中の介入、シェアリング後の評価では子どもの状態をしっかりと捉えた上で、ねらいを実現することが要求される。そのためにはエクササイズを事前に教師が体験してみるということがよいと思われる。

2 今後の課題

(1) プログラムの完成をめざして

9年間を見通した参加・体験型学習プログラムをベーシックプランとしてまとめることができた。しかし、これで終わりではなく、4月からも何人かの先生方をお願いをして1年間の流れの中でのプログラムを検証していくことが必要になってくる。

また、このプログラムでの学級の見取りについては観察法を用いることにした。観察法では経験の豊富な教師と新任の教師との見取りの差が出てきてしまうので、チームを組み、学級の状態を多面的に捉えていかなければならない。どの教師でも同じ意識で学級を見取れる方法の必要性がある。

(2) 関連性の検証

参加・体験型プログラムは学校生活全般との関連の中で人間関係を築くことができる子どもを育てていくプログラムである。特別活動の研究会議では今後このプログラムと他の取組との関連性を検証していく必要がある。また、その結果から、プログラムの内容についても再度検討を重ねていかなければならない。

最後に、研究を進めるに当たり、アンケートに協力していただいた皆様、ご支援ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | | | |
|--------------|-----------------------------------|-------------|---------|
| 國分康孝・岡田弘 | 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編①～②』 | 図書文化 | 1996年～ |
| 國分康孝・片野智治 | 『エンカウンターで学級が変わる 中学校編①～③』 | 図書文化 | 1996年～ |
| 國分康孝 他 | 『エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集』 | 図書文化 | 1999年 |
| 片野智治 他 | 『エンカウンターで進路指導が変わる』 | 図書文化 | 2001年 |
| 河村 茂雄 | 『タイプ別学級育成プログラム 中学校編』 | 図書文化 | 2001年 |
| 大阪グループワーク研究会 | 『たのしいグループワーク』 | 遊戯社 | 2004年 |
| 坂野 公信 | 『協力すれば何かが変わる<続・学校グループワーク・トレーニング>』 | 遊戯社 | 2006年 |
| 坂野 公信 | 『学校グループワーク・トレーニング3』 | 遊戯社 | 2006年 |
| 坂野 公信 | 『補訂 学校グループワーク・トレーニング』 | 遊戯社 | 2007年 |
| 中野目直明・小川一郎 | 『現代の特別活動 一理論と実践一』 | 酒井出版・育英堂 | 2004年 |
| 河村 茂雄 | 『データが語る①学校の課題』 | 図書文化 | 2007年 |
| 河村 茂雄 | 『データが語る②子どもの実態』 | 図書文化 | 2007年 |
| | 『児童心理』(特集:友達づきあいが大切) | 金子書房 | 2006年5月 |
| | 『教育カウンセラー標準テキスト 初級編』 | 図書文化 | 2006年 |
| | 「かわさき Kタイム」 | 川崎市教育委員会 | 2006年 |
| | 「児童生徒の豊かな人間関係を育てるために—中間報告書—」 | 川崎市総合教育センター | 2007年 |

【指導助言】

- | | |
|---------------------------|-------|
| 東京聖栄大学准教授(川崎市総合教育センター専門員) | 岡田 弘 |
| 川崎市立宮前平小学校教頭 | 江間 薫 |
| 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事 | 橋谷 由紀 |